

# 水 上 勉



商社で染料の仕事をしていた私は、福井県の染工場を回っていた。魚が美味しいぞ！と誘われて若狭湾にやって来た時に水上勉の足跡を知った。

福井県若狭と云えば、大作家となった水上勉の原点で艱難辛苦が詰まった忘れ得ぬ土地柄である。

年端もいかない少年時代に、寺に預けられ修行と称して、先輩坊主からのイジメや住職からの性的悪戯に耐え難い恨みを抱えていた。後年、少年は積年の恨みとして、現実には人を殺すことは出来ないで小説の中で恨みを晴らし殺した。と、雁の寺で直木賞を受賞した水上勉氏は語っていた。

雁の寺を読んで、厳しい人生の教訓を得て、水上勉作品集を読み漁った。

水上勉作品集では、不幸な身の上を耐え忍ぶ人にスポットを当てているのが多い、その中でも、とりわけ「盲いの人」には号泣した。

伊吉の祖母は盲目だった。

伊吉は幼少のころ祖母に守りをしてもらって育った。

で、はじまる冒頭のシーンは読んで30年以上経つが忘れ得ぬ書き出しである。祖母の盲目は小豆か大豆だったか、実の殻が目刺さったのが化膿して目が見えなくなった。だんだん見えなくなった目で祖母は部落の小間使いをしていた。

祖母は部落の家々に回覧板のようなふれごとを言い伝える役目を担っていて、見えなくなった両目で、小さい孫の伊吉を背負い、田んぼに足を入れないように伊吉が右に行くと田んぼだよ！肩を叩き、左に行くと川に落ちるよ！と囁き、家々を尋ね歩く道を導いていた。祖母は食事の世話にも精をだし、嫁とも仲良く暮らしていた。

見えなくなった目で祖母は、どんな気持ちだったのでしょうか

出稼ぎに行った先で女郎部屋に入り浸った父親を、連れ戻そうと見えない目で花街に出かけ、人目を憚らず掛け合うシーンがあった。わが身の不幸を嘆くより、息子を連れ戻そうとする家族愛が、そこにあった。

エコノミックアニマルと揶揄された高度経済成長期にバリバリの商社マンとして、人を出しぬいでまでも営業成績をあげようと血眼になり徹夜が続いた。そんな時に「盲いの人」に出会った。不注意で全盲になっちゃった祖母は、人生の不幸を嘆く前に、嫁いでくれた嫁さんを思い、孫とのつながりを大事にし家族を思った。祖母は不幸を不幸と思わずに家族の絆を大事にした。

「盲いの人」を読んで30年も経つが、生きていく中で、壁にぶつかりどん底を味わうことに、たくさん出会ったが、そのたびに「盲いの人」の全盲になった祖母の生き様を思い出す。祖母ほど強くなれないが、祖母を思うことで思いやりの心を引っ張り出そうとする私がいる。